

<実践事例>

インターンシップの実習形態は学習成果とどの程度関連するのか —CAVTの推移に着目して—

小山 治¹

本稿の目的は、2021年度に京都産業大学で開講された「インターンシップ3」という国内短期インターンシップ科目の履修者に対する3時点にわたる質問紙調査によって、インターンシップの実習形態は学習成果とどの程度関連するのかという問いを明らかにすることである。本稿の主な知見は、インターンシップの実習形態にかかわらず、学習成果の一つである Career Action-Vision Test (CAVT) のアクションとビジョンは第1～3波調査にかけて上昇したという点である。以上から、本稿の結論は、インターンシップの実習形態は学習成果と明確には関連しておらず、どのような実習形態であっても学習成果の向上に結びつきうるということになる。

キーワード：インターンシップの実習形態、学習成果、CAVT

1. 問題設定

本稿の目的は、2021年度に京都産業大学で開講された「インターンシップ3」（以降、IN3と略記する）という国内短期インターンシップ科目の履修者に対する3時点にわたる質問紙調査によって、インターンシップの実習形態は学習成果とどの程度関連するのかという問いを明らかにすることである。

2020年から世界的な規模で拡大した新型コロナウイルス感染症によって、国内におけるインターンシップ科目は大きな影響を受けたと推測される。実際、京都産業大学においても、2020年度には国内におけるインターンシップ科目であるIN3、海外におけるインターンシップ科目である「インターンシップ4」等のインターンシップ科目が休講を余儀なくされた。

こうした中で社会的に注目されているのが、オンラインによるインターンシップである。経済同友会インターンシップ推進協会（2020:9）は、オンライン実習への代替可能性が高い実施形態として、同時双方向型（グループワーク等）、オンデマンド型（座学講座等）を挙げ、オンライン実習による代替が難しい実施形態として、工場見学等を挙げている。その上で注目しているのは、コロナ禍の収束後も従前の実習にそのまま回帰することは現実的ではなく、企業・大学間の合意の上で実習形態を変更できる「柔軟な制度設計を行うこと

も検討の余地がある」と指摘されている点である（経済同友会インターンシップ推進協会 2020:10）。

こうした産業界の動向と比べて、インターンシップの実習形態と学生の学習成果（学習到達度）との関連性を実証的に明らかにした研究は、初見ほか（2021）等に限られている。そこで、本稿では、2021年度に京都産業大学で開講されたIN3の履修者に対する3時点にわたる質問紙調査によって、上記の関連性を明らかにする。その際は、①キャリア意識の発達に関する効果測定テストである Career Action-Vision Test (CAVT)（下村ほか 2009）と②インターンシップの実習形態に着目する。①は、法政大学の心理学者が中心となって開発した大学生のキャリア発達を測定するためのテストである。後述するように、IN3の目的はキャリア発達と密接に関連しているため、汎用的で一般性の高いCAVTによってIN3における学生の学習成果を測定することは適切であると考えられる。②は、実習がオンラインのみか、オンラインと対面の複合か、対面のみかという3カテゴリーの変数である。実習形態に着目することによって、各実習形態のメリット・デメリットを明らかにできる。

本稿の構成は次の通りである。2章では、IN3の概要を説明する。3章では、IN3の履修者に対して実施した質問紙調査の概要を説明する。4章では、分析で使用する変数の設定を行う。5章で

¹ 京都産業大学 全学共通教育センター

は、本稿の問いに答えるための分析を行う。6章では、本稿の主な知見をまとめて結論を示し、その含意について考察した上で、今後の課題を指摘する。

2. インターンシップ科目の概要

本稿の調査対象となるインターンシップ科目は、2021年度に京都産業大学で開講されたIN3という4単位の授業科目である（履修対象者は2・3年生）¹⁾。

IN3は、キャリア形成支援教育科目の一つであり、事前授業、実習（就業体験）、事後授業という3つのプロセスを経て単位が認定される集中講義科目である。授業の目的は、上記の3つのプロセスを通じて「職業観や社会性を養い、具体的な目標を設定して進路に対する考え方を明確化すること」である（シラバスより引用）。新型コロナウイルス感染症対策として例年と比べて定員が約4分の1に縮小された。その結果、1クラスの履修者数が10名前後で全5クラスが開講された（履修登録者数は50名）。シラバスは全クラスで共通であり、授業で使用するワークシートも共通である。また、ティーチング・ガイドブックという担当教員向け指導書によって授業内容も一定程度標準化されている。授業後には振り返り会議が開催され、教職員間で履修者の出席状況や授業実践等について情報共有や意見交換が行われている。

この科目を履修するためには、科目の志望理由と応募先企業（団体）を選んだ理由から構成されるエントリーシートを提出して面接選考を受ける必要がある。エントリーシートの採点は主に担当教員が担い、面接は教職員が担う。選考の結果、履修を許可された学生が履修登録を行う。学生の実習先となる企業等については、エントリーシートの内容、面接結果および成績評価を踏まえ、事務局であるキャリア教育センターが決定する（2021年度の派遣実習先は26社）。

事前授業は14コマある（6～7月に開講）。内容は、インターンシップの目的（何のために参加するのか）、インターンシップの目標（どんな自分になりたいか）、実行計画（どのように実行するか）という3点をグループワークやディスカッションによって言語化させることである。また、ビジネスマナー講義、人権研修、情報倫理講義も行われる。事前授業の総括として、前述した目的・目標・実行計画をまとめたプレ・インターンシップレポートが課される。

実習先は、主に近畿地方を中心とする企業等で

ある。学生は、8～9月に原則として2週間（実質10日間）以上の就業体験をする予定であったが、今回は新型コロナウイルス感染症の拡大によって、実習日数だけでなく、実習形態（対面・オンライン）にも変更が生じた。ただし、実習形態にかかわらず、実習中には事前授業で立てた目的・目標を達成するための行動が求められるとともに、実習日報を書くことも課される。

事後授業は6コマある（実習後の9月に開講）。内容は、インターンシップの活動報告（何を実行したか）、評価（何を得たか）、成長（どう変わったか）、今後に向けて（どう活かすか）という4点をグループワークやディスカッションによって言語化させることである。最終的に、すべての学生が上記の4点をワークシートに記入してクラス内で発表する。さらに、各クラスの代表学生が全クラスの学生と実習先である企業等の前で同じ内容を発表する（2021年度は全体報告会と当日の直前の授業のみオンラインで実施）。事後授業の総括として、以上の内容をまとめたアフター・インターンシップレポートが課される。

3. 質問紙調査の概要

本稿の分析で使用するものは、IN3の履修者に対する3時点にわたる質問紙調査のデータである²⁾。調査名は、「インターンシップ科目に関する学習状況調査」（以降、学習状況調査と略記する）である。調査の設計は筆者が行った。本調査は、事務局であるキャリア教育センターの協力を得て、IN3の①事前授業初日（6月19日）、②事前授業最終日（7月24日）、③事後授業最終日（9月21日）の3回実施された。いずれも集合調査法による自記式質問紙調査である³⁾。氏名等を記名式にしたため、3回の調査の回答をマッチングできる。以降では、1～3回目の調査をそれぞれ第1波調査、第2波調査、第3波調査と呼称する。

第1波調査の有効回収数は50ケースであり、履修登録者数50名を分母とした有効回収率は100.0%である。第2波調査の有効回収数は47ケースであり、同様の有効回収率は94.0%である。第3波調査の有効回収数は48ケースであり、同様の有効回収率は96.0%である。3回の調査すべてに回答したのは45ケースである（同様の有効回収率は90.0%）。本稿では、この45ケースを分析対象とする。ただし、分析では欠損値を除外するため、常にケース数が同じであるとは限らない。

第1～3波調査では、インターンシップへ行く目的等、ビジネスマナーの習得度、本科目全般の

学習・理解状況、実習先に関する学習状況、実習先に関する理解状況、CAVT等を質問しており、個人内の回答状況の変化を測定できる。第3波調査では、実習先の職場環境や事後授業の学習・理解状況等も質問した。

表1は、履修登録者、各調査の回答者、分析対象である第1～3波調査すべての回答者の基本的な変数の分布を比較したものである。それによれば、性別等の変数の分布には大きな違いはみられないことがわかる。前述した高い回収率も考慮すれば、学習状況調査には相当程度の代表性があると考えられる。

本稿では、将来を含めたIN3の履修者を母集団として想定し、かつ標本が無作為抽出されたと仮定して参考までに統計的検定を行う。本稿の母集団はIN3の履修者であるため、分析結果の過剰な一般化には十分な留意が必要である。

4. 変数の設定

表2は、分析で使用する変数の操作的定義をまとめたものである⁴⁾。以下では、各変数について

簡潔に説明する。

従属変数は、前述したCAVTである。CAVTは(CAVT)アクションと(CAVT)ビジョンの2つに分かれており、それぞれを6個の質問項目(各5件法)によって測定する尺度である。(CAVT)アクションは「学外の様々な活動に熱心に取り組む」等の6個の質問項目から構成される。本稿では、「かなりできている」=5～「できていない」=1として6個の質問項目の平均値を算出した。(CAVT)ビジョンは「将来のビジョンを明確にする」等の6個の質問項目から構成される。本稿では、「かなりできている」=5～「できていない」=1として6個の質問項目の平均値を算出した。質問項目間の内的整合性を示すCronbachの α 係数を確認すると、(CAVT)アクションについては、第1～3波調査においてそれぞれ0.822、0.818、0.832となっており、(CAVT)ビジョンについては、第1～3波調査においてそれぞれ0.902、0.891、0.911となっている。いずれも内的整合性が高いことがわかる。

独立変数は、CAVTの個人内変化を指す調査回(時点)とインターンシップの実習形態である。後

表 1. 調査対象者の概要

変数	カテゴリー	履修登録者	第1波調査 の回答者	第2波調査 の回答者	第3波調査 の回答者	第1～3波調査 すべての回答者
性別	男性	42.0	42.0	42.6	41.7	42.2
	女性	58.0	58.0	57.4	58.3	57.8
学年	3年生	78.0	78.0	78.7	77.1	77.8
	2年生	22.0	22.0	21.3	22.9	22.2
学部	経済学部	2.0	2.0	2.1	2.1	2.2
	経営学部	30.0	30.0	31.9	29.2	31.1
	法学部	22.0	22.0	19.1	22.9	20.0
	現代社会学部	6.0	6.0	6.4	6.3	6.7
	国際関係学部	8.0	8.0	8.5	6.3	6.7
	外国語学部	14.0	14.0	14.9	14.6	15.6
	文化学部	14.0	14.0	12.8	14.6	13.3
	理学部	4.0	4.0	4.3	4.2	4.4
	情報理工学部	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
生命科学部	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	
実習日数	6日以上	36.0	36.0	36.2	35.4	35.6
	5日以下	64.0	64.0	63.8	64.6	64.4
実習形態	オンラインのみ	46.0	46.0	46.8	47.9	48.9
	オンラインと対面の複合	22.0	22.0	19.1	20.8	17.8
	対面のみ	32.0	32.0	34.0	31.3	33.3
<i>N</i>		50	50	47	48	45

注：小数点以下の桁数の丸めのため、合計が100.0%にならない箇所がある。

表 2. 分析で使用する変数の操作的定義

変数名	操作的定義
(CAVT) アクション	次の 6 個の質問項目 (各 5 件法) それぞれについて、「かなりできている」= 5 ~ 「できていない」= 1 として平均値を算出した (理論上の範囲は 1 ~ 5)。 ①学外の様々な活動に熱心に取り組む ②尊敬する人に会える場に積極的に参加する ③人生に役立つスキルを身につける ④様々な人に出会い人脈を広げる ⑤何ごとにも積極的に取り組む ⑥様々な視点から物事を見られる人間になる
(CAVT) ビジョン	次の 6 個の質問項目 (各 5 件法) それぞれについて、「かなりできている」= 5 ~ 「できていない」= 1 として平均値を算出した (理論上の範囲は 1 ~ 5)。 ①将来のビジョンを明確にする ②将来の夢をはっきりさせ目標を立てる ③将来、具体的に何をやりたいかを見つける ④将来に備えて準備する ⑤将来のことを調べて考える ⑥自分が本当にやりたいことを見つける
インターンシップの実習形態	オンラインのみ、オンラインと対面の複合、対面のみという 3 カテゴリーの変数とした。

者については、表中にある通り、3 カテゴリーの変数とした。

5. 分析

5.1. (CAVT) アクションの推移

図 1 は、インターンシップの実習形態別に (CAVT) アクションの推移をまとめたものである。

第 1 ~ 3 波調査にかけてインターンシップの実習形態別の (CAVT) アクションの推移は、オンラインのみ (N=22) で 3.25 → 3.83 → 4.06、オンラインと対面の複合 (N=8) で 3.46 → 3.46 → 4.04、対面のみ (N=15) で 3.41 → 4.07 → 3.98 となっている。参考までに、対応のある分散分析 (反復測定) を実施すると、被験者内効果の検定では有意差がある。調査回とインターンシップの実習形態との交互作用は有意ではない。

5.2. (CAVT) ビジョンの推移

図 2 は、インターンシップの実習形態別に (CAVT) ビジョンの推移をまとめたものである。

第 1 ~ 3 波調査にかけてインターンシップの実習形態別の (CAVT) ビジョンの推移は、オンラインのみ (N=22) で 2.92 → 3.36 → 3.71、オンラインと対面の複合 (N=7) で 2.95 → 3.29 → 3.71、

対面のみ (N=14) で 3.13 → 3.77 → 3.95 となっている。参考までに、対応のある分散分析 (反復測定) を実施すると、被験者内効果の検定では有意差がある。調査回とインターンシップの実習形態との交互作用は有意ではない。

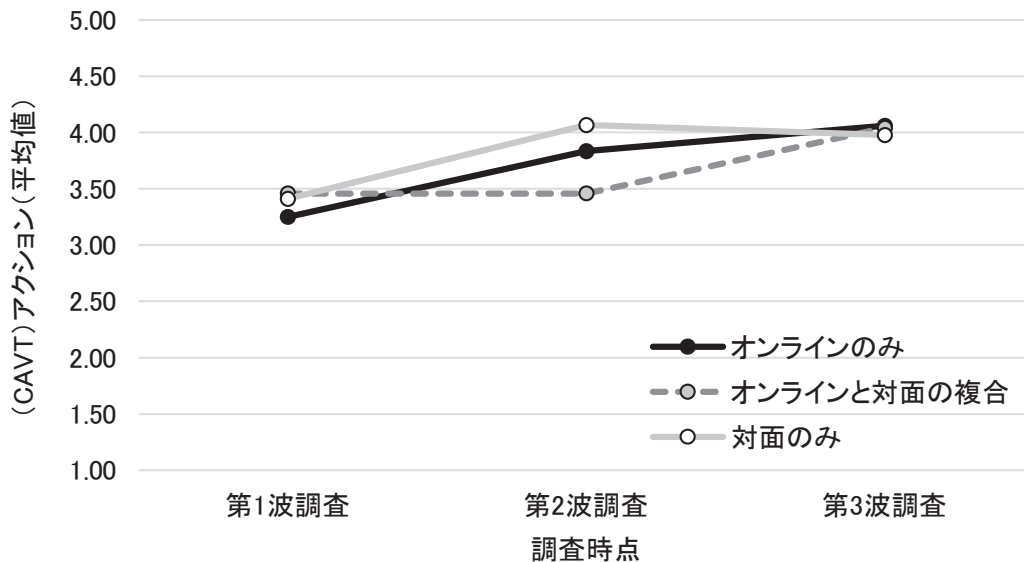
5.3. 考察

以上の分析結果について考察する。

サンプルサイズが小さいという点には十分な留意が必要であるものの、(CAVT) アクションと (CAVT) ビジョンが特に第 1 波調査と比べて第 3 波調査において上昇しつつ、その中でインターンシップの実習形態による影響がみられなかったという結果については、次の 3 つの解釈ができるように思われる。

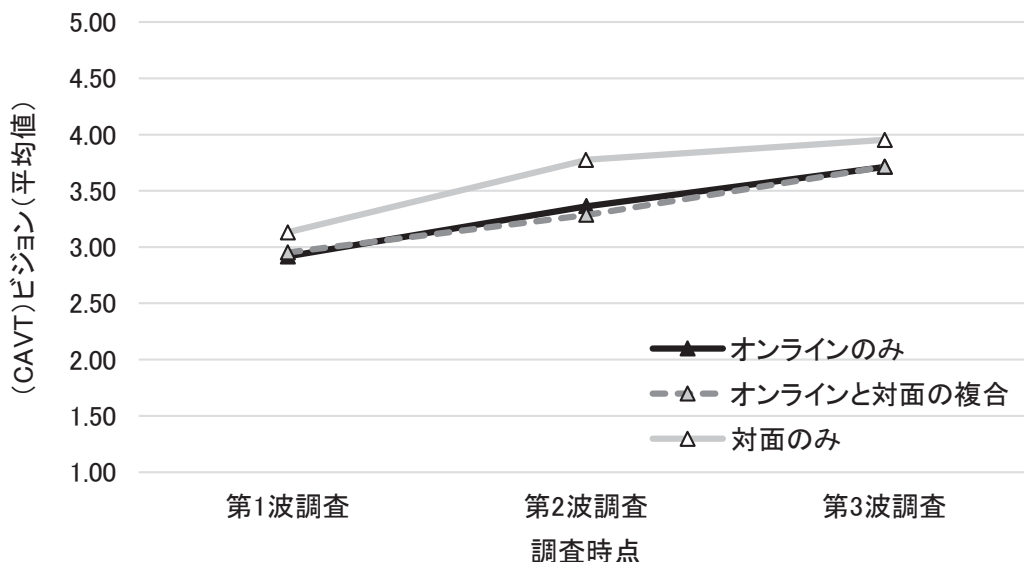
第 1 に、授業運営によって、オンラインのみの実習やオンラインと対面を複合した実習であっても、対面のみの実習と遜色ない学習成果を上げることができたという解釈である。前述したように、IN3 には、シラバスとワークシートの共通化、授業後の担当教員の振り返り会議の開催等といった特徴がある。また、今回の IN3 の担当教員 5 名は過去に同一科目を担当した経験があり、指導力が安定していたと考えられる。これらの要因が前述した結果に結びついた可能性がある。

第 2 に、IN3 の履修者が元々優れていたため、



注：オンラインのみの N=22、オンラインと対面の複合の N=8、対面のみの N=15 である。

図1. インターンシップの実習形態別にみた (CAVT) アクションの推移



注：オンラインのみの N=22、オンラインと対面の複合の N=7、対面のみの N=14 である。

図2. インターンシップの実習形態別にみた (CAVT) ビジョンの推移

オンラインのみの実習やオンラインと対面を複合した実習であっても、対面の実習と変わらない学習成果を上げることができたという解釈である。前述したように、2021年度はIN3の定員が大幅に縮小された。そのため、IN3を履修した時点でインターンシップにおいて学習成果を上げるだけの能力のある学生が選抜されていた可能性がある。

第3に、実習先によるオンライン実習に関する創意工夫が功を奏したという解釈である⁵⁾。例えば、オンラインのみの実習となったある企業は、

通常は近畿地方の学生のみを受け入れていたが、オンライン化によって関東地方の学生も受け入れる方針を採った。これによって、対面の実習では不可能であった地域間の学生の交流が生まれた。こうした試みが学生の学習成果を高める一因となった可能性がある。

今回の分析からはいずれの解釈が最も妥当なのか確定はできない。おそらく現実には、すべての解釈が併存するような状況であったと推測される。

6. 結論

本稿では、2021年度に京都産業大学で開講されたIN3の履修者に対する3時点にわたる質問紙調査によって、インターンシップの実習形態は学習成果とどの程度関連するのかという問いを明らかにしてきた。本稿の主な知見は、インターンシップの実習形態にかかわらず、学習成果の一つであるCAVT（アクションとビジョン）は第1～3波調査にかけて上昇したという点である。

以上から、本稿の結論は、インターンシップの実習形態は学習成果と明確には関連しておらず、どのような実習形態であっても学習成果の向上に結びつきうるということになる。ただし、本稿は2021年度のIN3のみを対象としており、サンプルサイズも小さいことから、この結論を過剰に一般化することには極めて慎重になる必要がある。

それを踏まえて、本稿の知見の含意について考察する。

本稿の知見によれば、条件が整えば、対面実習にこだわらなくとも、インターンシップ科目は学生の学習成果に結びつきうる。確かに、オンライン実習では、実際の職場を体験できないというデメリットはある。しかし、その分、大学と実習先は職場体験では味わえない教育内容は何かという点を自覚的に考えて協働しうる。この点で、オンライン実習を最初から否定的に評価することは適切ではないだろう。

最後に、今後の課題を指摘する。

今回の分析結果を踏まえて、今後はインターンシップの実習形態にかかわらず、CAVTが上昇した要因を分析する必要がある。具体的には、質問紙調査のデータ分析を進めることに加えて、①オンライン実習を採用した実習先が具体的にどのような教育内容を提供したのか、②担当教員が具体的にどのような授業を行ったのかという点を定性的に明らかにすることが考えられる。

謝辞

質問紙調査にご回答いただいた学生の方々、当該調査の実施にご協力いただいた担当教員（統括教員：西田貴明准教授）の方々、データ入力等にご協力いただいたキャリア教育センターの事務職員の方々に厚くお礼申し上げます。

注

1) 以降のIN3に関する記述は、小山（2021）に依拠しており、数値等を更新したものである。な

お、IN3については、2021年度から2年生も履修可能となった。

2) 以降の記述は、小山（2021）の内容を今回の質問紙調査に関する内容に更新したものである。

3) ただし、3回目の調査については、当日がオンライン授業となったため、質問紙のWordファイルに回答してもらうという形式を採用した。

4) 以降の記述は、小山（2021）の内容を踏襲・修正したものである。

5) これまでIN3では、事務職員が実習先の開拓・維持のために実習前・実習中・実習後に実習先訪問を行ってきた。こうした地道な信頼関係構築活動が実習先の創意工夫を引き出した可能性がある。

参考文献

- 初見康行, 坂爪洋美, 梅崎修 (2021) 多様なインターンシップ経験と効果の一考察. 日本労働研究雑誌 733: pp.41-57
- 経済同友会インターンシップ推進協会 (2020) オンライン実習に関する教育価値向上のポイントについて (報告). https://www.doyukai-internship.or.jp/pdf/internship_online.pdf (参照 2022.02.24)
- 小山治 (2021) 実習先の職場環境は学生をどの程度成長させるのか——国内短期インターンシップ科目の履修者に対する3時点にわたる質問紙調査. 高等教育フォーラム 11: pp.1-9
- 下村英雄, 八幡成美, 梅崎修, 田澤実 (2009) 大学生のキャリアガイダンスの効果測定用テストの開発. キャリアデザイン研究 5: pp.127-139

How Relevant is the Form of Internship to the Learning Level? : Focusing on the Scores of Career Action-Vision Test(CAVT)

Osamu KOYAMA¹

The purpose of this paper is to examine how the form of internship is relevant to the learning level by conducting a three-wave questionnaire survey of university students who took the internship course of Kyoto Sangyo University. The main findings are as follows. The scores of Career Action-Vision Test(CAVT) increased between the first-wave survey and the third-wave survey regardless of the form of internship.

In conclusion, the form of internship is not relevant to the learning level and internship can have a positive effect on the learning level regardless of the form of internship.

KEYWORDS: Form of Internship, Learning level, Career Action-Vision Test(CAVT)

2021年12月22日受理

1 Center for General Education, Kyoto Sangyo University

